

探訪記

水立、迫の古い墓

—豊薩戦に於ける海賊討伐につながらるか—

会員 安部 力

この夏のことである。水立^村迫^区の守田要吉さんから、近所に源平合戦の頃の戦死者の墓が三基(九体)あるとお報せであった。

私は、それは源平合戦より、豊薩戦中水立の入江の海賊との戦いで、戦死者のものであるかと考えた。この海賊戦について、「佐伯市史」には次のように書かれてゐる。

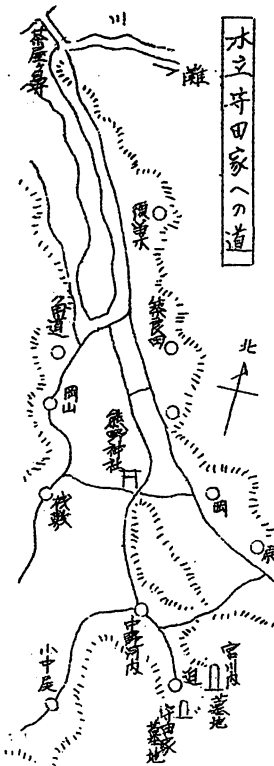
「天正七年(一五七九)のころ、日向の南浦北浦の土民が薩州方に通じて三河内に城砦をつくりこもつていたが、その一部が海賊となつて、しばしば佐伯の沿岸を侵し、これを押領しようとした。^(佐伯海賊)梅牟礼城では人民の訴えて入敷を出して、その都度追払い、抵抗するものは討ちとつていたが、同年七月二十一日、たまたま浦廻りをしていた泥谷・高畑・広末らの人々が、水立の入江に侵入してきた海賊どもと出会い、船に乗りこんで賊二十六人を斬りすてた。残る賊は戻らばうの態で船も荷物もすて、山を越え峯を伝つて逃げさつた。」

私は、この戦いの戦死者の墓ではあるまいかと考えた。今まで水立の入江の海賊との戦とは、どの地点であつたのだらうかと常々考へていた。今でこそ水立の入江も、堆積物で陸地が広くなり美田となつてはいるが、四百年

前の頃は相当奥地まで海であつたものだらう。子供の頃熊野神社の横、川の反対右岸に墓地があり、どのような墓であつたかは記憶にない。この地点が船付場であり、数戸の民家が立ち並んでいたとのことであるが、この時代には、熊野神社は今の所には無かつたと思う。何時の頃ははつきりしないが、目笠部落の氏神を昇格、村社としたものではないか。熊野神社の御神燈には「文政」の字が見られ、庄屋泥谷太兵衛外殺人の名が刻まれ、境内の立木等から見ても、この年代ではないかと考へられる。

守田氏は此の地点から敵が上陸して来たという。七月二十一日とは真夏の戦いである。海賊の戦死者の墓とすれば、佐伯軍は海賊の退路より陸地に追ひ上げて戦つたものだらうか。又は掠奪中を襲つたものだらうかなど、独りで想像を逞ましようとしている。

十一月のある日、私は機会を見て守田家を訪ね、案内して貰つた。守田家の墓地は、茶屋ヶ鼻まで遠望できる山麓の台地であり、その片隅に戦死者の墓といふのが一基あつた。墓といふより、目印に置いてあるという程度のものである。墓盤の形の椽に平たく、約五、六角程で字は書かれてなく、又遺体の上というよりも、時折場所も置きかえられたものらしい。この墓に、二つの遺体が葬られてゐるといふ。



今一墓はここから六段程離れた所にあったというが、墓らしいものを見出すことが出来なかった。

この外に「六士の墓」というのがあるが、この墓は隣家の水許家の土地であり、家を建てるときに移したという。この六士の墓の調査は後日にゆずることにして、その他の昔話を聞くことにした。それにしても、六士の墓という言葉を聞くことにはした。それにしても、六士の墓に残されていないのが不思議に思われた。またこの墓は昔話の如く、何時の時代のことが、守田氏は何と語ってはくれなかった。

この守田家の墓地は、地名を尾崎というところにある。そして佐伯史談第五号（昭和四十年六月発行）に、宝曆（一七五〇）の頃佐伯藩の宗門奉行土屋亦兵衛の手記になる、「御願分中寺社記」の中に記されている尾崎天神とはこの天神だという。私尾沖区は尾崎鼻の天神を尾崎天神と書いていたが、守田氏は沖区は天神は、尾崎鼻天神といふのが本当であり、この迫区のが本当の尾崎天神であるといふ。尾崎天神とは守田家の良先に建立されているようなものである。私は子供の頃、この天神の境内で遊んだことがある。

「昔は良い時代があったものだ」と守田氏はいふ。今では法律とか、土地の所有権とか、難しいものだが、何時の頃か不明であるが、入江が次第に堆積して陸地が広くなるにすぎない、荒地を開拓しては移り住んで行き、現在の水立地区が出来あがったという。新しい住居さつくるため、朝星一夜星齋いて開拓した田畑も、今は休耕田という名称で、また昔の草原に還って行っている。封建時代先祖たちが、重税に苦しむながら開拓したところである。先祖の佛様がいたら、何というだろう。

水立地区が三十軒ぐらゐの頃から住んでいたという旧

家A家の如きは、はじめ岡山に住み、其の後熊野神社横の揚り場に住み、其の後さらに中野河内に移り住んで現在に至っているというように、簡単に移住が出来たものらしい。また迫区の宮川内とは、共に古い部落であり、二男三男は荒地を開拓しては新宅を建て、水立の各地に移り住んでいった。この代表的な部落は、小中尾部落であるという。

次に明治の頃、はじめ水立に瓦工場が出来た時、守田家の瓦が、造つてもらった第一号であったという。なるほど、見ると主家の屋根の両端に、珍らしい形が鬼瓦があげられている。

この守田家とは、「水立談本」に記載されている、日露戦の勇士喇の手として戦死した故守田栗吉氏は、当主の叔父に当たる人である。

また、旧家B家の如きは、「泥谷大庄屋は外來者である。頭をさげられるか」と言っていたという。このB家も今だに承えているとの話を聞き、「水立の歴史を探る」に書いたことの裏付けになると思ひ、面白く感じた。

旧家には、色々古い伝承が残されているものである。守田氏に、そんな伝説や古いことを「村の歴史」の資料として、あとから提供してほしいと希望し、再訪を約して守田家を後日した。

（おわり）

かずらのしげる路わきて 葛原浦見おろせば
真砂子の白く美しく 細く波寄す一寸に
西南後の古蹴場 つわものども夢いすこ
ただ冬枯の津島岬 姿の高く仰がるる